

(六) 法海寺遺跡

位置 法海寺遺跡は、知多市八幡の上平井から中島につづく、天台宗の古刹薬王山法海寺の寺境を中心とした遺跡である。多量な弥生式土器が検出された昭和四十八年の調査は、現在の伽藍地の中心であつて、地籍は知多市八幡字平井一九番地で、発掘区の一部は南の平井二二番地の二に及んでいる。

遺跡のあるのは、約四段にわたる八幡谷の出口の南端で、この谷の第二砂堆が丘陵に接するところに近い。砂堆列は海進期の終末にあたる縄文後期のころまで浅海底にあり、沿岸州として海岸線と平行して堆積した砂州が、海退による陸化にともない姿をあらわしたもので、海成の粗砂層からできており第四紀層の沖積世に属している。そして南の八幡小学校や八幡中学校のある段丘など、沖積低地をとりまく丘陵は、第三紀の鮮新世に属しており、尾張夾炭層と対比される常滑層群の砂層や粘土層が互層をなして堆積している。

さらに、砂堆と段丘の間や、砂堆と砂堆との間にみられる水田地形は、浅く埋没した海成粗砂層の上に、禾本科を中心とした植物が腐食してできた黒泥土の層が耕作土との間にはざまれて堆積している。水田農耕がはじまる弥生時代は、そのころ沼地となっていた低地、すなわち黒泥土地帯を水田として利用し、砂堆の上に集落を形成していたのである。

昭和四十八年、境内に八幡福祉館が建設されることになった。かね

てから法海寺址の研究をすすめ知多市文化財保護委員でもあった杉崎章氏は、建設予定地が古代伽藍の中心線をふくむことを知りことの大さにいちはやく気づき、各方面への意見具申をした。努力のかいあって知多市教育委員会の事業として発掘調査がおこなわれることになったのである。

この調査で予期しなかつた弥生式土器が多量に出土した。ここでは弥生時代の遺跡としての法海寺遺跡について述べる。

遺跡 昭和三十三・三十四年、杉崎章・芳賀陽の両氏が先に調査チを設定した。以下、南の方へ順次三段の間隔をとり第二・第三・第四トレンチを定めた。第一トレンチの東端で瓦溜が検出されたので、これと直角に第五・第六トレンチを入れた。さらに第四トレンチの南方に第七・第八トレンチを設けて発掘調査をすすめた。

固く踏みかためられた表土層下に、黄色の砂が小さいブロック状にかたまって混入する黒色砂層がある。この層からは、古瓦が古代・中世の陶器とともに出土する。その下層は暗褐色の砂層となり、多量の弥生式土器が出土した。知多地方で知られる弥生式土器の中では、初期のころの型式である続水神平式土器も出土し、以下、広義の瓜郷式土器そして獅子懸式土器、さらに長床式・寄道式・欠山式とつづき、資料のゆたかな歴代遺跡であることが認められた。最下層は黄褐色の砂層となりこれが基盤である。

遺物 調査によつて出土した弥生式土器は、文様や器形の特色によつて六群に分けられる。

第一群土器 (図1—48の1～23)

器面を粗い条痕で仕上げた土器を

第1類とし、これに伴存する土器を第2類と大別できる。第1類には、壺・無頸壺・深鉢・鉢の器種がある。口径が大きく、口唇に貝殻の腹縁による刻目をつけ、口縁部を肥厚させ、外側に指頭状圧痕をもつもの(1)、口縁部を受け口状に折り曲げ曲折部に指頭を用いた連続圧痕を付したもの(2)などがある。頸部から胴部へかけては、横位の条痕を主とし、波文や撥ね上げ文、重曲線文を組み合わせたものが多い。器面の施文法は、口縁から直ちに斜位、横位羽状などの条痕をのこすものが一般である。中には一～二条の突帯をめぐらすものもある。無頸壺(3・4)は口辺部をくの字状に内曲させ、胴部が張り、口縁が肥厚した器形をなしている。条痕は概して横位である。深鉢形土器は、口辺部がゆるく外反し、胴部がやや張り出し、下胴部のしまる形である。口端面には二～三条の凹線をめぐらす、貝や棒状具による連續押引き文をもつなどの文様があり、器面には、口縁から斜め單方向の条痕をつけたり、口辺部の横位条痕と下方の縦位の羽状条痕を組み合わせたものなどがある。

第二群土器 (図1—48の24～33)

出土した資料はいずれも壺形土器であった。外反した口辺部に太い頸をもつものの(24)で、頸部に横位の凹線をひき、そこから口縁へ籠状具を用いて撥ね上げるようにする深い沈線をもつもの、同じ手法であるが籠状具を使っているものがあ

る。口端は丸味をおび黒色を呈している。口端面に一条の凹線をめぐらし、口縁直下から鋭い串状施文具による斜格子を施したもの(31)もある。胴部文様には歯数の多い櫛状具・串状具・竹管を併用した例が多い。

第三群土器 (図1—49の1～20)

二類に分けることができる。第1類には、口辺部をきつく外反させ、口端は丸味をおびたつくりで、口端に八個一組の圧痕を加え、頸部に不揃いな波文を有するもの(1)、頸部に籠による撥ね上げ文をもつもの、撥ね上げ文を施文しようと籠で切って、一種の斜格子文の効果をもたらしたもの(3)などがある。胴部の文様には、細密な櫛状具による横線・波長の長い波線、断続的に加えた弧線などがある。この類の土器には黒色や暗褐色を呈するものが多く、また土器の裏面が剥離し荒れたものがみられる。

第2類 口縁を受口状につけ、口端内側に刻目を施文した広口壺(10)、口端が直行する細頸壺(16)、口端に一条の沈線をめぐらし頸部に櫛描縦線を施したもの(17)などがある。壺形土器の胴部はいずれも縦や斜めの刷毛目を地文としており、二条ずつ接した八条一組の櫛状具による横線と波文を交互に施したもの、半割竹管と思われる施文具で二条一組の横線をいく段も施したもの、籠状具で刷毛目文を磨消した横線をいく段もいたるものなどがある。壺形土器は三例あり、いずれも口縁をくの字形に外反させ、口端面の下方に刻目を施している。器面全体に縦位・斜位の櫛描線を施すが、口縁内面にも横位や斜位の櫛描線を加えている(18～20)。

第四群土器 (図1—49の21～27・図1—50)

広口壺は、口縁部を垂直

に折り曲げ受け口状につくり、折り曲げた部分の外面に三条の凹線文をめぐらすもの（図1—49の21）、口端をおさえて縁帯をつくり出し、そこに三～四条の凹線をめぐらすもの（図1—49の22・23）、無文のものなどがある。細頸壺には、口縁を内湾させ袋状につくり、凹線と櫛描の刺突文・横線などで飾るもの（図1—49の24・25）、口縁に二条の凹線を加え、頸部に櫛描縦線を施したもの（図1—49の27）などがある。

無頸壺は一例であるが、口縁にそって九条の凹線文を入れ、部分的に櫛描縦線を引き、下方に櫛による刺突文帶をもつもの（図1—50の3）である。

壺形土器の胴部文様は、第三群土器第2類にみられた刷毛目縦線を櫛描横線や波文で切る手法を受け継いだもの、横線と波線を組み合わせたもの、刺突文・横線・波線を組み合わせたものなどがある。

甕形土器は、口径三〇^{ミリ}と大形のものの一例と、口径二〇^{ミリ}前後のもの五例である。大形の甕は口縁を折り曲げて受け口状とし、外面に浅い凹線をめぐらせ、籠状具で刻みを施こし（図1—50の10）。器面全体に櫛描の斜線で格子文を描き、頸部近くに一条の波文を加えている。小形の甕はいずれも口縁部をくの字に外反させ、口端に刻みを入れ、器面には格子文を施し、内面にも櫛描横線のあるものが多い。

高坏は、口縁部をつば状に張り出すもので、端面に二条の凹線を施文している（図1—50の16）。また浅鉢の口縁部があり、内湾ぎみの口縁の外面に三～四条の凹線をめぐらしている（図1—50の17）。

頸部が短く球形の胴部をもつものである。口端は外方からおさえ縁帯をつくり、端面に三～四条の凹線をめぐらしたもの（1・2）、凹線の途中に縦の線を入れ、内面に扇状文をつけたもの（6）、口縁内側に羽状文をめぐらし、口端面には三重の円文を付したもの（7）などがある。胴部は不揃いな櫛描文、竹管による円列文と刺突による凝縄文を施したものなどがある。

甕形土器は口径一六^{ミリ}から二二^{ミリ}のもので、器面は整形痕の刷毛目がわずかにみられ、無文のものもある。口端は平切りにされたものもあり施文はみられない。

高坏は口縁内部の屈折部が稜をなしたもので、脚端は外へ大きく開き、脚の透孔は三穴と四穴がある。

第六群土器（図1—51の18～27） 壺形土器は小形で折れ曲がるようにな外へ開き、屈折部が稜をなすものがある（18）。文様はみられない。口縁が内側へ丸味をもつて曲がり、口唇部が尖る、より新しい要素をもつもの（19）、小形で口縁部がS字状をなし、胴部に斜位の刺突文をめぐらすものもある。

高坏は、坏の口端が平切りで、器体が研磨されているもの、口縁部の上面が張り出し鎧状をなし、内側に線刻文が施されているものがある。脚は裾が開き、杯部は半球形をなすものもある。

出土した弥生式土器は、土器型式の上から六群に分けることができた。第一群は、三河で成立した水神平式土器文化の伝統をもつたものであり、条痕文土器とそれに併存する土器で、続水神平式と呼称され、本遺跡でもこれに尾張平野の朝日式が一片伴出する形で検出されてい

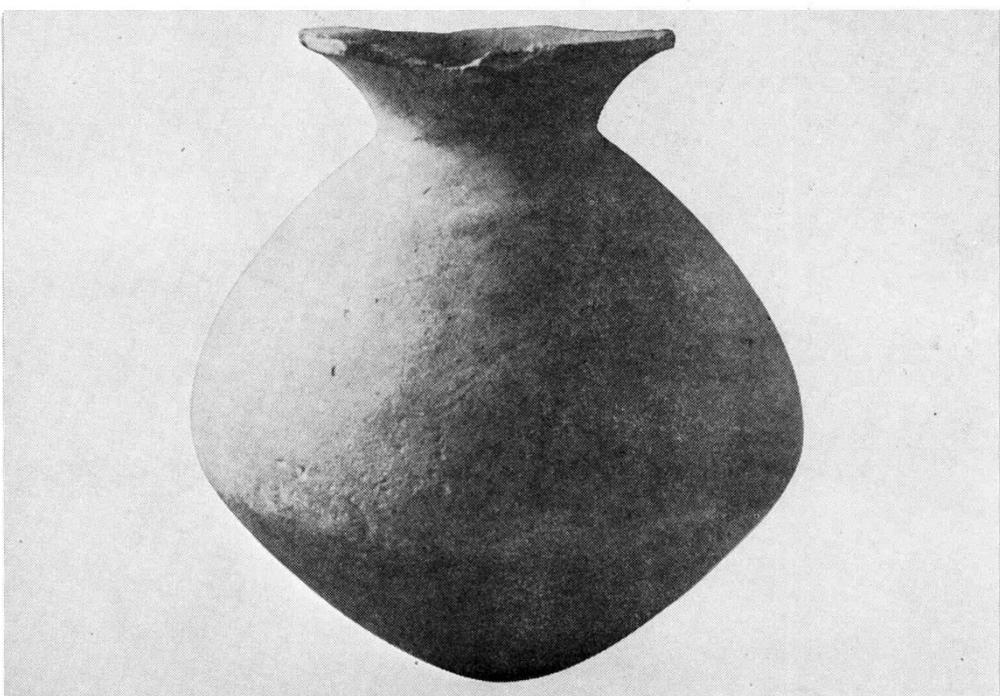
る。第一群土器は、知多半島における野崎遺跡第一群土器に比定されるものである。

第二群土器は野崎遺跡第二群としてわけたものである。広義の瓜郷式土器である。そして第三群土器は、本遺跡から近い獅子懸遺跡を標準とした獅子懸式土器であり、尾張平野の外土居式土器をともないながら認められる。

第四群土器は、東海地方において、尾張で成立し、三河から遠江の浜名湖周辺までという広範囲を文化圏とした長床式土器であり、この遺跡の弥生式土器としてはもつとも量が多い。この地域の先行型式である獅子懸式の器形や文様をひきついでいる例もあるが、主体をなすのは外土居式の流れをくんだ土器群であった。

第五群は寄道式であり、第六群は欠山式とよばれるものである。そして東海地方における欠山式の終末は、四世紀の初頭とされている。ともあれ、法海寺遺跡は、法海寺が創建される数百年前、この地方に水田農耕の文化が入った直後から、弥生集落の中心としてこの砂堆が利用されたことを明らかにした。

そして法海寺の旧寺地の堀でかこまれた中であるが、伽藍地の本堂の位置から約四〇㍍も東へ離れて、現在では民家の中に入っている中島一二番地の平松知司氏宅では、古くから一個の弥生式の壺形土器が伝えられている。高さも胴幅も二八釐の大きさで、無文の欠山式に編年される資料である。



法海寺遺跡、東地点の壺形土器

第2節 弥生文化

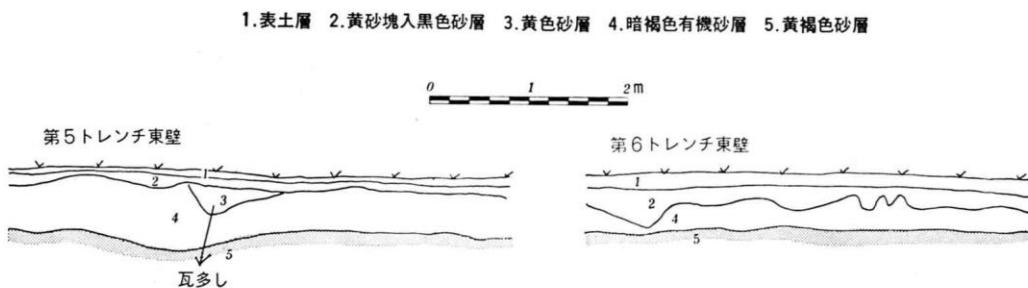
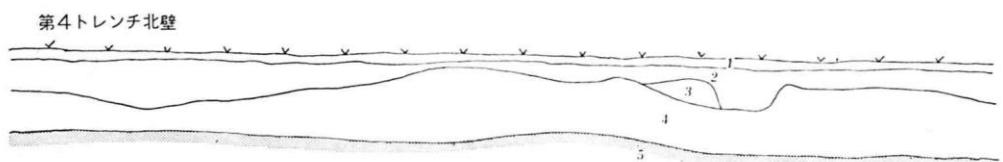
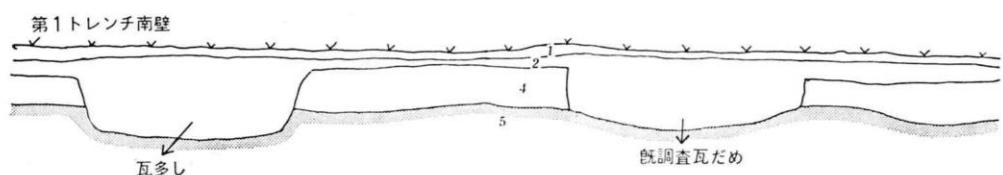
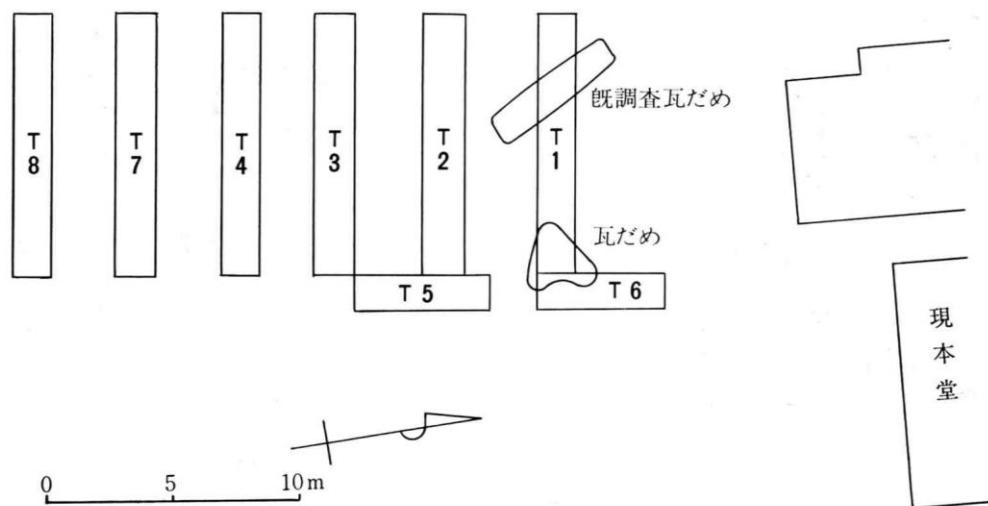


図1—47 法海寺遺跡の発掘区と層序断面図

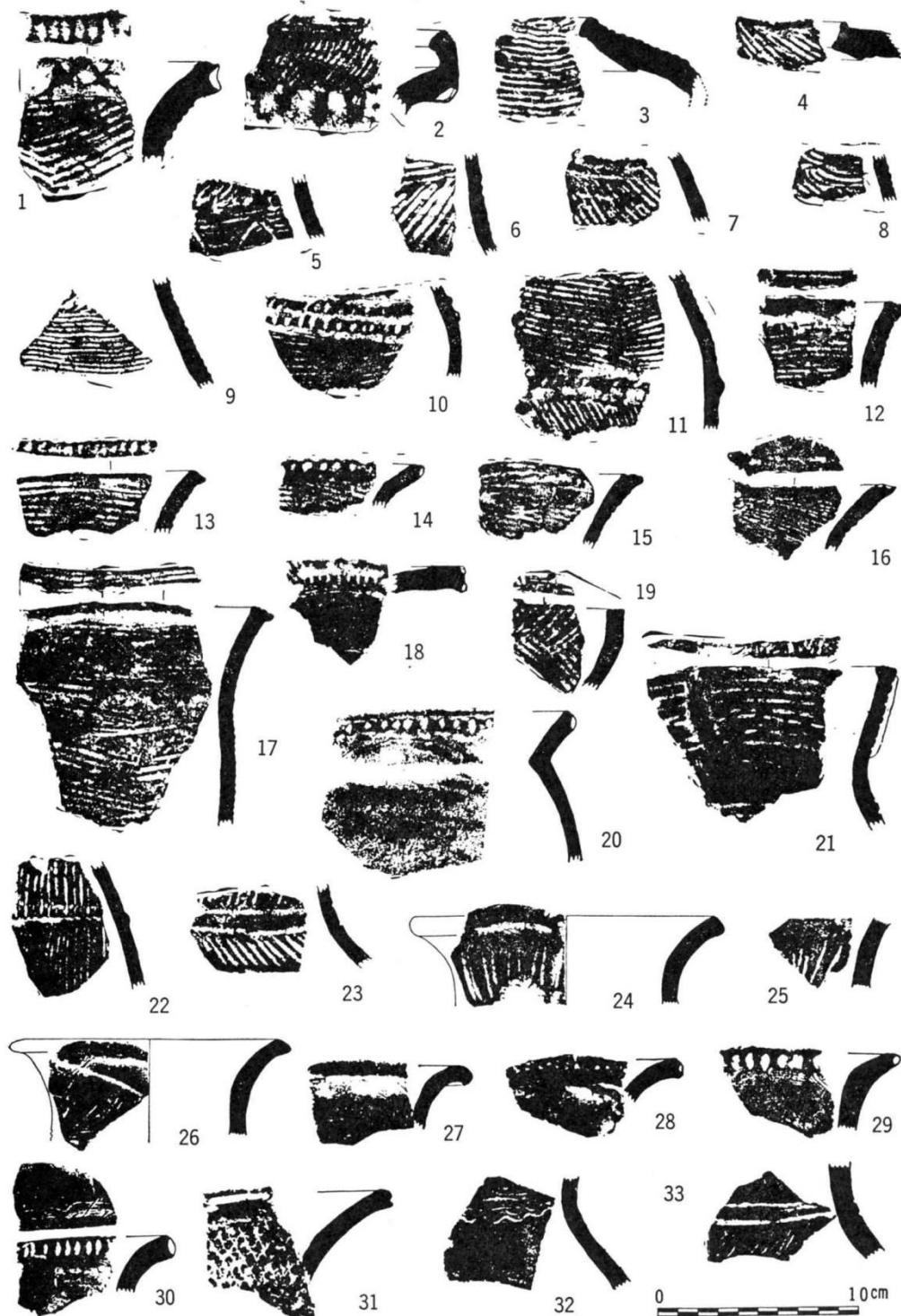


図1-48 法海寺遺跡出土の土器拓影 (1) (1~23第1群土器、24~33第2群土器)

第2節 弥生文化

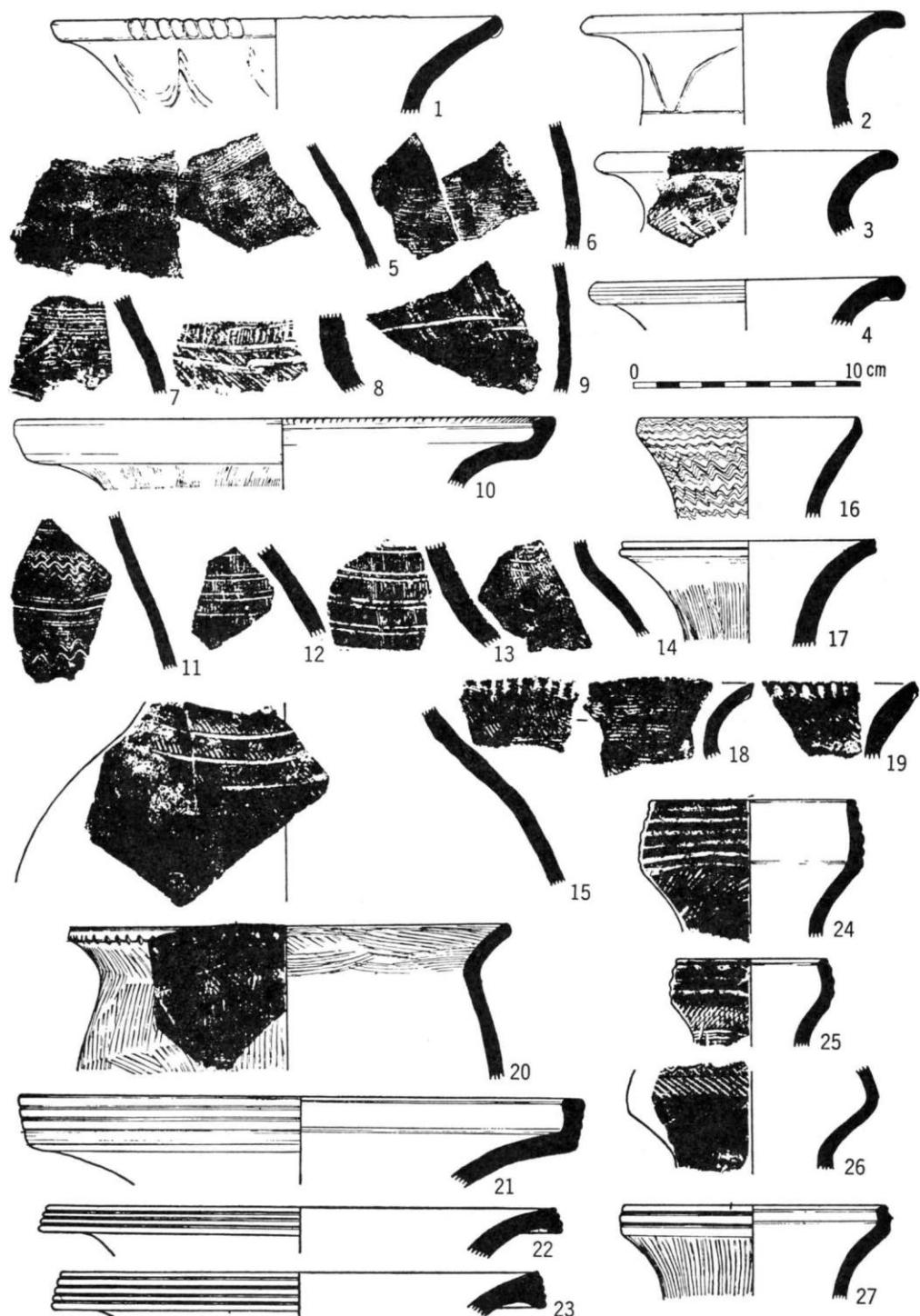


図1-49 法海寺遺跡出土の土器拓影と実測図 (2) (1~20第3群土器、21~27第4群土器)

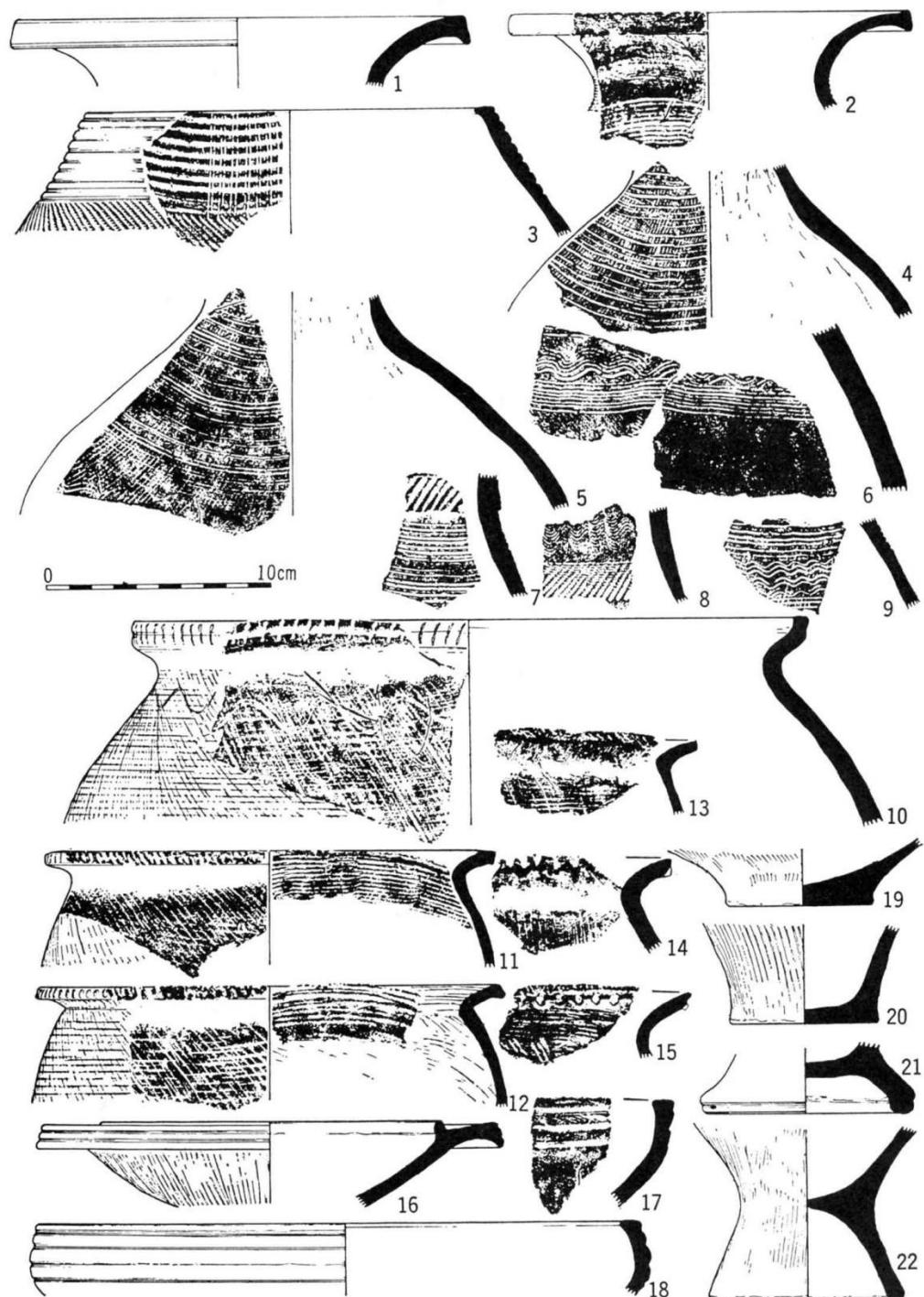


図1—50 法海寺遺跡出土の土器拓影と実測図 (3) (第4群土器)

第2節 弥生文化

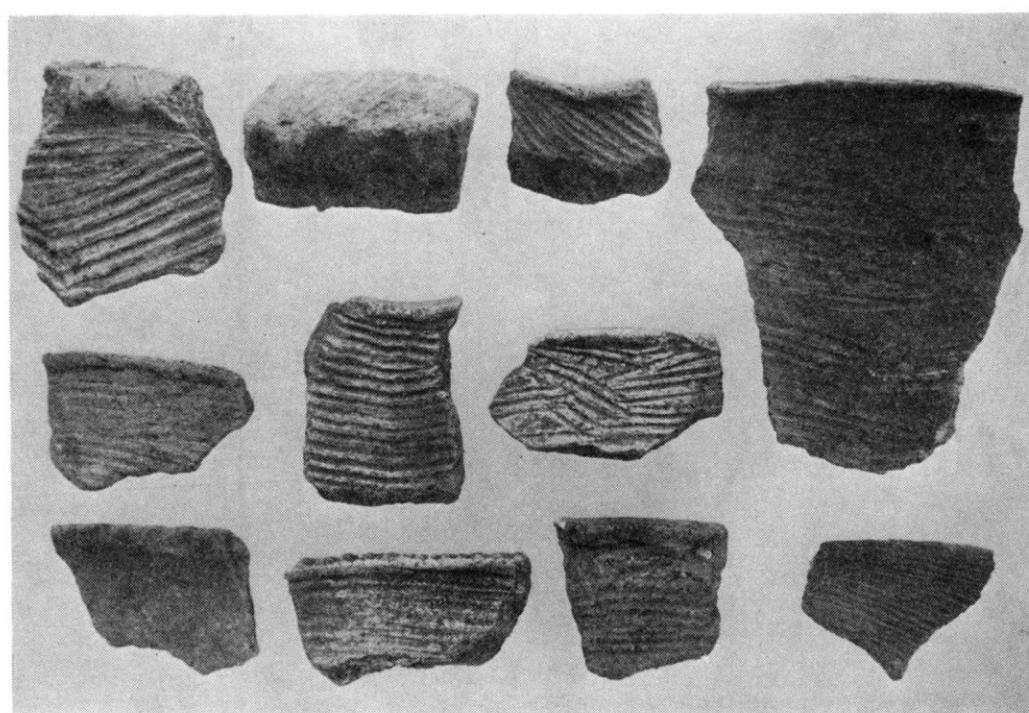
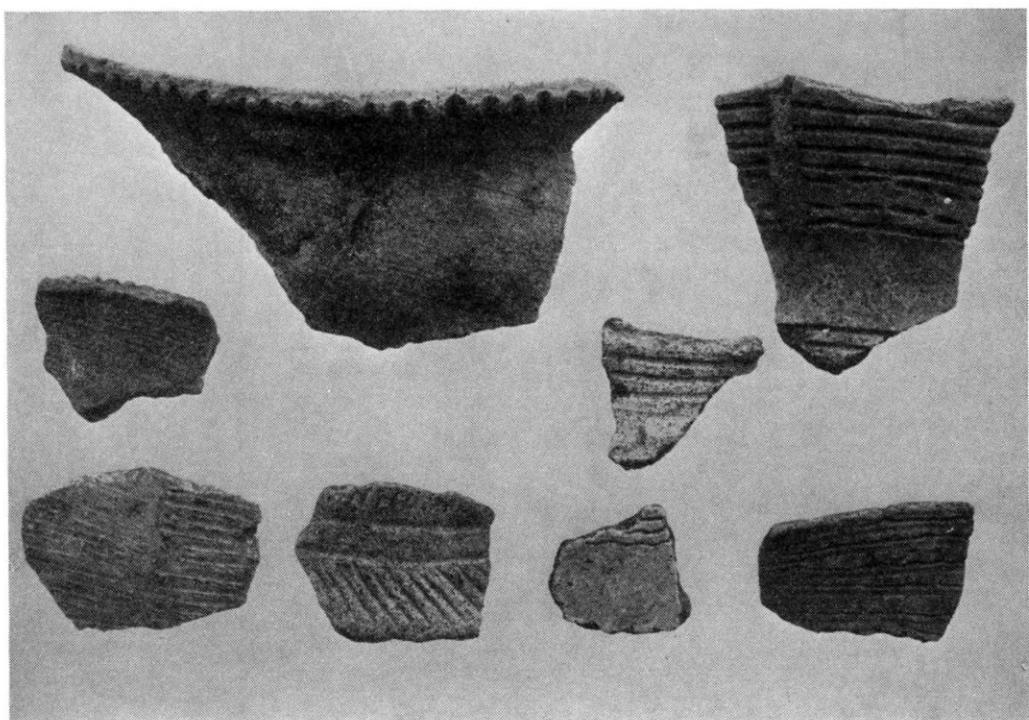


図1-51 法海寺遺跡出土の土器拓影と実測図 (4) (1~14第5群土器、15~27第6群土器)

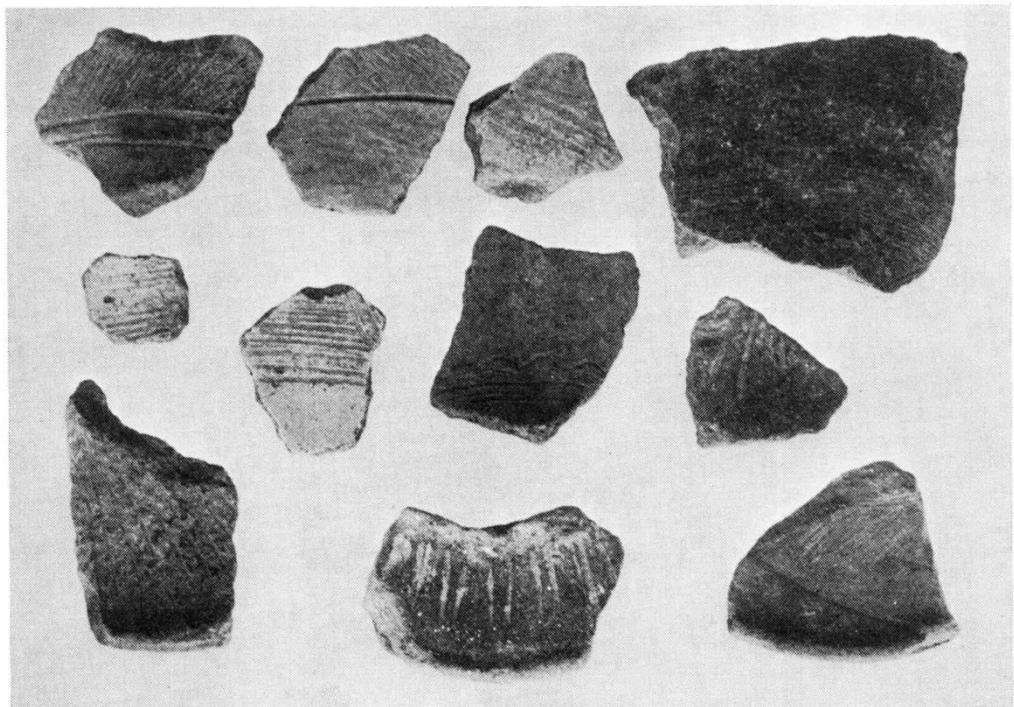
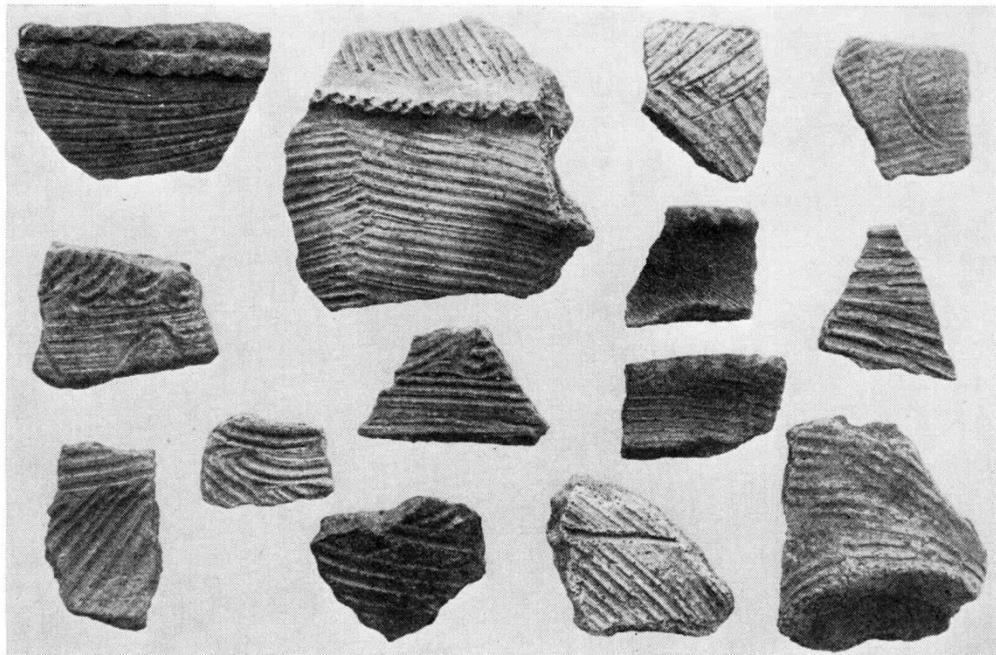


法海寺遺跡の発掘調査

第2節 弥生文化

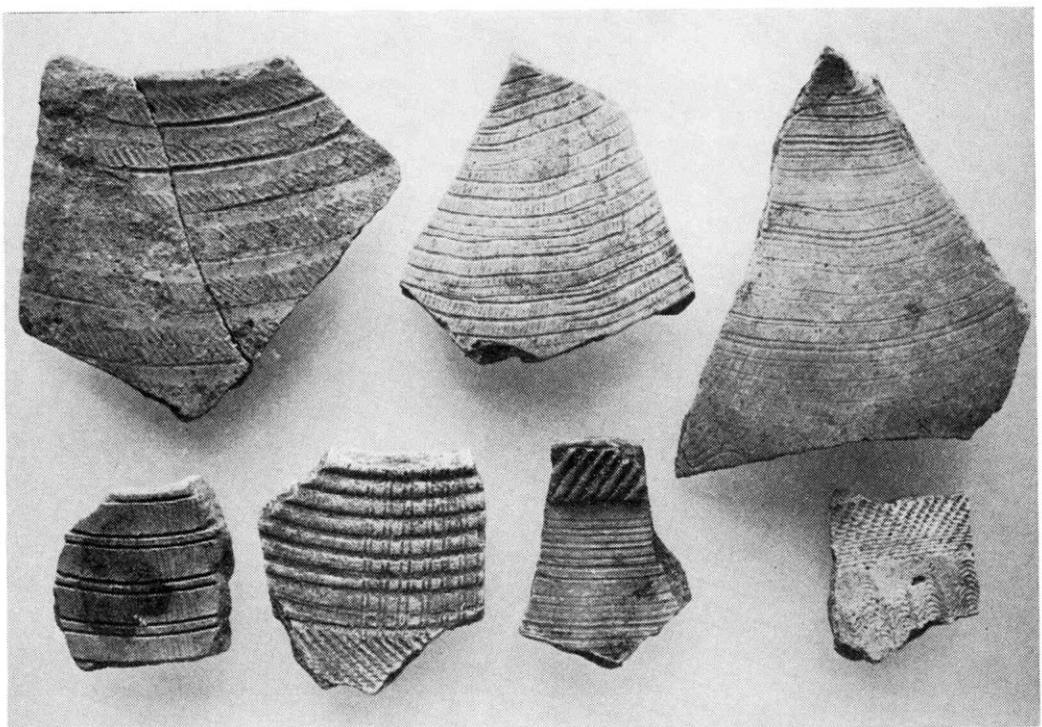
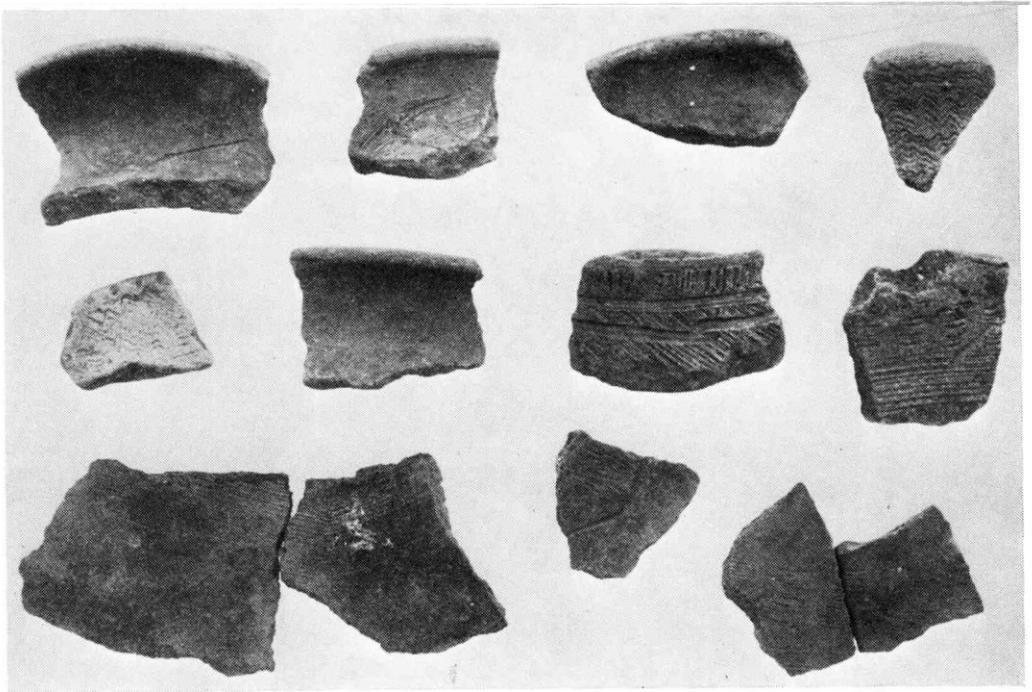


法海寺遺跡出土の土器 (1)

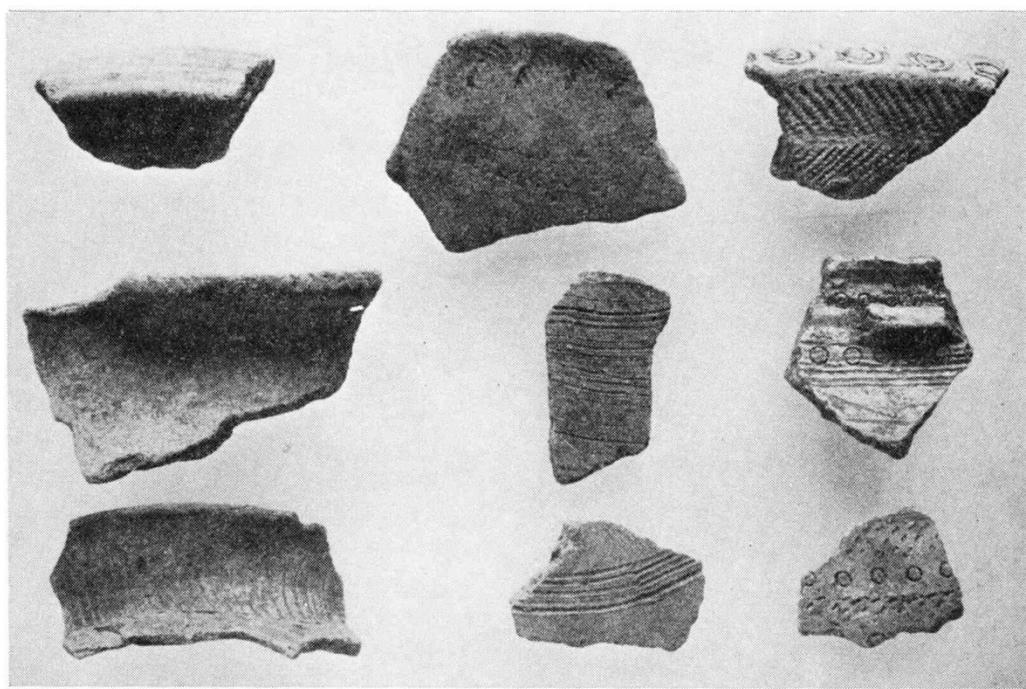
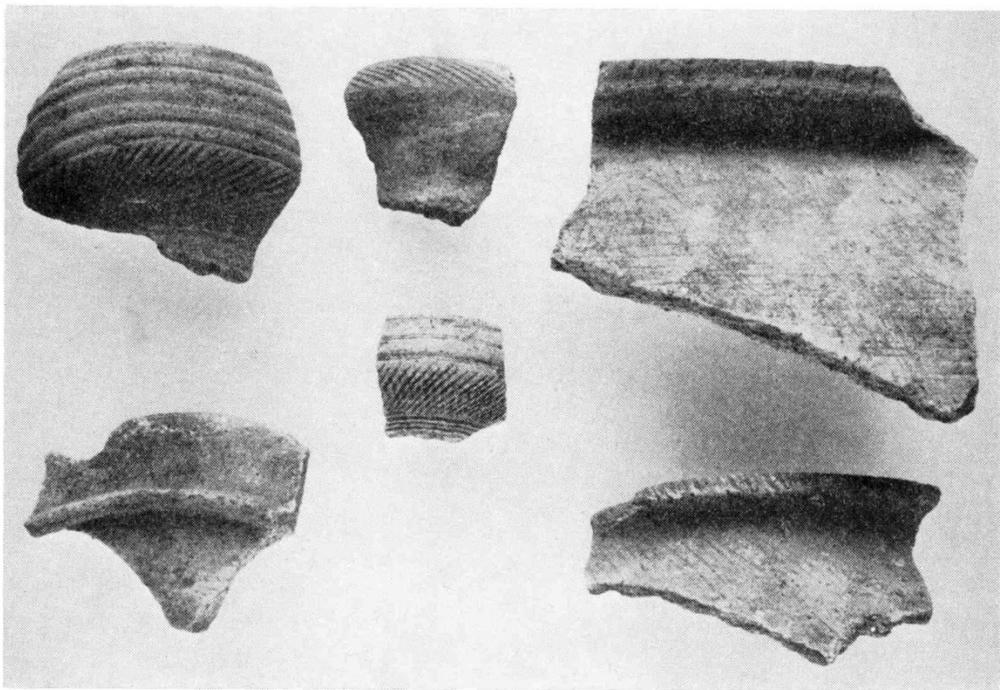


法海寺遺跡出土の土器 (2)

第2節 弥生文化



法海寺遺跡出土の土器 (3)



法海寺遺跡出土の土器 (4)